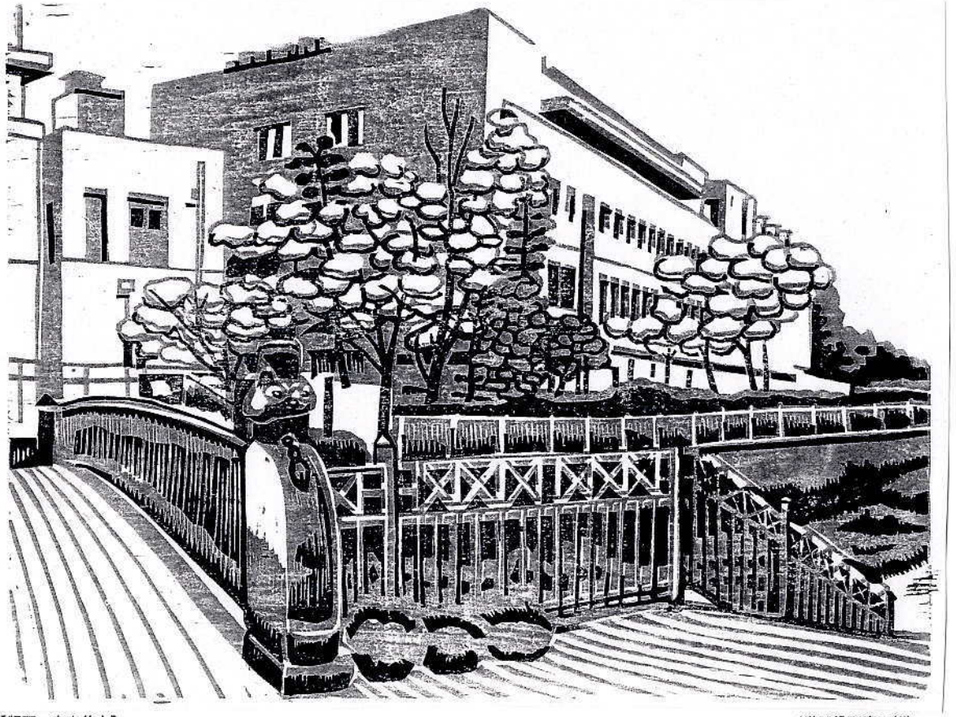
いたちがわらばん

通刊41号　鼬川・独川 / 川原番・瓦版　08 春号



【版画　宗森英夫】　（栄区役所裏の桜）

それぞれの桜

春の訪れを象徴する桜の開花には多くの人が何がしかの思い出があるようだ。

今から三十年前、私が戸塚区上郷の地に移住した当時、周囲には田園風景が色濃く残っていて、いたち川の周りはほとんど田んぼだった。三十代半ばだった私は通勤に山手学院のなかを抜けて港南台駅まで歩くのが常だった。学園の中の通路に二十一本の桜が植えられていた。距離にすると百メートルに満たないのだが、朝は足早に駆け抜け、夜は照明の中に浮かぶ桜のトンネルを見上げながらゆっくりと帰宅したことがなつかしく思い出される。当時は桜にいろいろな種類があるなどと知る由もなかったが、枝先に密集して咲く花びらは如何にも派手で、故郷で見ていた山桜とは歴然と違っていた。

ソメイヨシノは今では何処にでも普通に見られ、桜の代名詞みたいになっているが、私の心の中の桜は山桜である。新緑の芽吹く頃に、山の斜面に薄紅色の新緑がこんもりと、あちこちに点在する。やがて周囲の新緑がやや濃くなる頃になると、薄紅色の葉に極く薄いピンクの可憐な花が咲き、山の斜面が白く見えるようになる。本格的な春の訪れだ。

うす紅に葉はいちはやく萌え出でて
　　咲かむとすなり山ざくら花　（牧水）

と郷土の歌人が詩っているように山桜は花より先に葉が出るのが他の桜と違うようだ。奈良吉野の桜も山桜である。

上郷市民の森に関わるようになって、オオシマザクラに出会った。森には十数本の大木がある。花は乳白色で地味であるが、その香りの良さから桜餅にも使われている葉は、他の桜よりやや大きくて濃い緑に鋸歯がある。天に向け四方に伸びた枝は逞しく雄大である。初夏の頃には小さな赤紫の実を落とす。

（上郷森の会　木村）

切り取り線

この部分を切り取ってファイルにすると便利です

倉田小学校ビオトープづくり

栄区に隣接している倉田小学校（戸塚区）。「あっ、田んぼのある学校ね」と思われる方が多いと思います。しかし、道路建設が相次ぎ、近い将来倉田で最後の田んぼもなくなってしまいます。学校の周りの自然がどんどんなくなっていきます。このような状況の中にあっても、「大地から　共に輝く　倉田っ子」の教育目標の実現に向けて、子どもが自然と関わっていく体験は、これからも大事にしていきたいと考えています。

下倉田方面から階段を登ると、南門の左脇にコンクリートでできた立派な池があります。実験用にも使われていた池です。しかし、その池は、魚が数匹いるものの、あまり整備された池ではありませんでした。

「何とかしなければ！」

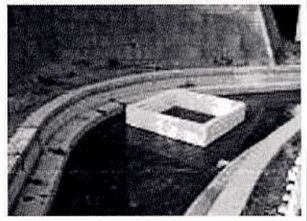
そこで、児童環境委員会が中心となって、魚や水の中の生き物が棲む、植物のあるビオトープを作ることにしました。

そして、「ビオトープのことなら、この人に聞け！」と言うことで、和久井さんの指導を受けることにしました。和久井さんには、何度も倉田小学校に足を運んでいただき、循環装置を活かしたビオトープづくりについて、アイデアをたくさんいただきました。というより、計画を立てていただきました。幸い「緑と水の森林基金」の助成を受けていたので、すぐに実行に移すことができました。まず、鯉のいる中心部にコンクリート枠を入れました。次に、周りに赤土を入れて、玉石で押さえ、植物を植えました。そろそろ土が落ち着いてきたので、水を入れて、春になったら、メダカを入れる予定です。どんな池ができるのか、子どもも、保護者や地域の方々も楽しみにしています。（副校長　住田昌治）

「手をどろどろにしながら、校舎裏から赤土をバケツに入れて、みんなで『重い、重い』と言いながら運んだ。環境委員会として、池を作り終え、みんなから『すごい！』と言われたい。スコップで土を掘り、みんなで協力して石を運び、池の周りに並べ、植物を植えた。自分は、自然が好きで、自然をなくしていくのは嫌だ。環境で少しでも役に立ちたいと思い、環境委員会に入った。池づくりは楽しくできた。以前の池は、深くて住みやすいだろうと思っていたが、実は違った。土があることで、魚たちは、棲みやすくなることを知った。土を入れることで、水がきれいになることが分かった。」

（倉田小学校　6年　蓮沼　譲）

ビオトープ作業の流れ



和久井さんや明治学院大学のボランティアの人たちと一緒に土を入れたり、玉石を敷いたり、植物を植えたりしました。倉田小学校をどんどん緑化していきます。

発行年月 2008年3月
通刊41号

発行：独川OTASUKE隊（いたちがわおたすけたい）
OTASUKE隊事務局：栄区役所区政推進課企画調整係　〒247-0005　横浜市栄区桂町303-19
TEL 045-894-8161　FAX 045-895-2260
栄土木事務所下水道・公園係　〒247-0007　横浜市栄区小菅ヶ谷1-6-1
TEL 045-895-1411　FAX 045-895-1421
（お便り・お問い合わせは こちらまで）

いたち川の環境復元の紹介（ 復元のあゆみ　その1 ）

いたち川は２級河川で全長は６．１７Ｋｍ（神戸橋までの距離）で昭和６２年に上流部の日東橋～神戸橋間２．５Ｋｍが国の「ふるさと川事業」に指定されています。いたち川の改修方法は、下流部分の一般的河川改修部分（治水を目的とした改修）と環境河川の復元を目的とした改修とに大別されます。

いたち川の改修工事は、昭和４５年に「都市小河川補助事業」の認定を受け、国、県、市による洪水対策の工事が始まり、昭和６０年頃には、いたち川橋から区役所裏までが完了して川幅が広がり、頻繁に起きていた洪水の悩みから解放されましたが、そのころの河川改修は、河川線形を直線的に、護岸は平滑にすることで、流下速度を速くして洪水地帯を下流へ、下流へと移行させることを目的とした工事が行われていたのです。

完成した河川は水を流すだけの排水路になり、晴天時の水深は１０ｃｍ以下で夏場の水温は４０℃以上にもなり魚が住めるような河川ではありませんでした。川の中には多くのゴミが投棄され、水は腐敗し、汚濁水の中で動いているものはボーフラ（蚊の幼虫）だけでした。この水は柏尾川、境川を経て江の島で太平洋に流れ込んでいますから、海水浴場の水質が悪化して騒がれたのもこの頃です。一河川だけの原因とは思いませんが一つの要因であることには間違いありません。

昭和５５年頃から全国的に河川や海域の汚染が問題視され始め、そのころ新聞紙上を賑わしたのは東京都内を流れる多摩川、墨田川、神田川の汚濁の状況がよく紹介されていました。海域の浄化を進めるためには河川の浄化、下水道の普及を進めるために多くの公共工事が行われました。しかし、下水処理場の処理にも限界があり、流れ出た河川で自浄作用がなければ、水は再び腐敗を繰り返す事になってしまいます。

●　川は何のためにあるのか

時代によって、川は利用方法でいろいろな役目を果たしてきたようです。いたち川は昭和の初めまでは、稲作のための農業用水と木材の運搬用の水路として、宅地化が進んだ昭和４０年代からは排水路として機能してきました。改修工事が完了した現在では、川は地球温暖化の防止に大きな効果があることが注目されています。川の水は蒸発を行っていますから、気化熱により大地から熱を奪い冷やしていることや、川に沿って風が生じることにより、排気ガス、温室ガスによるヒートアイランド現象を分断して生じさせない効果があります。

東京都内の川はほとんどが暗渠化されたため、新しく建てるビルには屋上緑化を義務づけたり、高速道路によって暗渠化された川を元に戻すことが計画されるなど話題となってます。

●　川は自然の浄化槽

川に生物が住めるようにするために、水深を保ち、水流を確保することで水温を下げるような工法を取り入れる必要があります。それは、木杭、自然石、土、植物など自然の物を取り入れて、昔の田園の小川を川の中に復元させる工法です。その川の中では、プランクトンの発生する場所を造り水の中の有機物を食べてもらい、それを魚が食べ、また鳥がその魚を食べる。鳥の糞などが植物を育てると云った植物連鎖が恒久的に起こる河川空間を目指し、川は自然の浄化漕でなければならないのです。

●　水の流れを好む生き物と、澱みを好む生き物

生物の生息空間を考えると、魚や水性昆虫の中にも、流水域（水の流れている）と止水域（水が澱んでいる）を好むものに大別されます。流水性の魚は、アユ、オイカワ、ウグイなどで、止水域を好むものは、フナ、コイ、メダカ、モツゴなどです。水生昆虫では、ゲンジホタル、オニヤンマなどは流水性で、ヘイケボタル、シオカラトンボ類は止水域を好む昆虫です。両者が生息できる川構造としなければなりません。

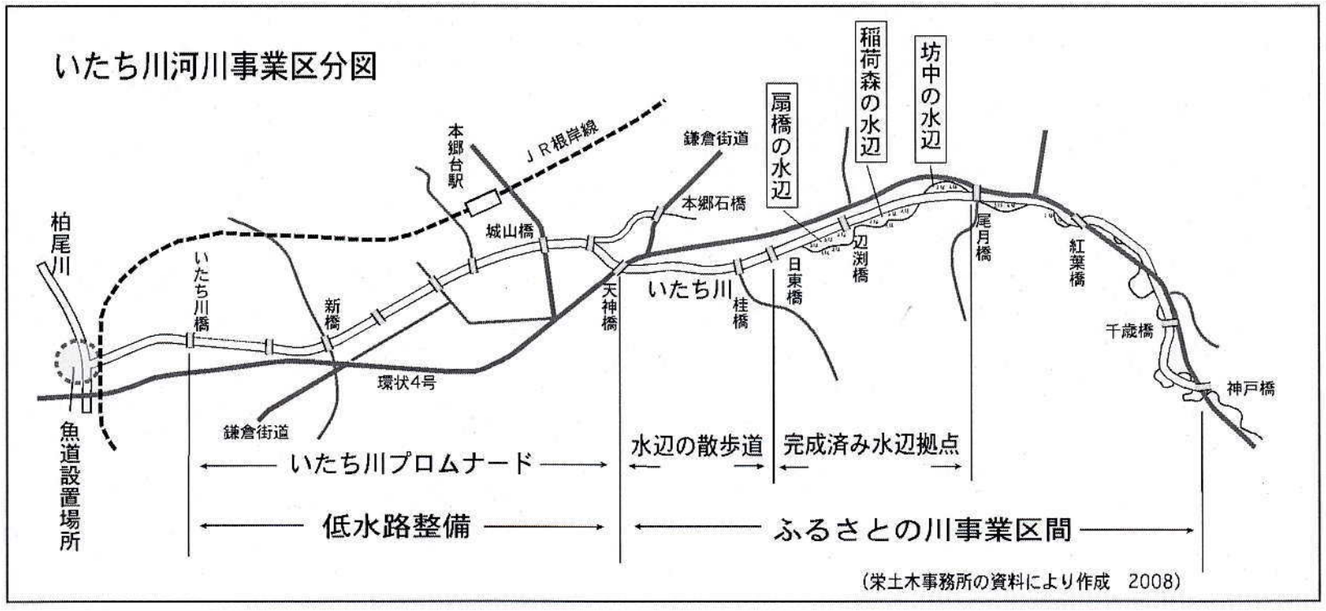
●　樹種の選定や維持管理における留意点

河川における樹種の選定にあたって、防災の観点から耐火性を最重要視しますが、周辺の雑木林の樹種を主体として、いろいろな生き物のエサ等にもなる樹種を選定しています。よって、中には毛虫が付く木などもありますが、植物と虫と鳥と人間の、生き物のつながりを理解して、正常な食物連鎖が起こりうる河川空間をつくり上げています。

維持管理においても、鳥が孵化する時期やホタルが卵の時期等を把握して草刈りを行ったり、部分的に草を刈らないパッチ的刈り方を採用する等、生き物に優しい管理を行っています。

～次号は、いたち川の多自然型川づくりの具体的工法や施工場所の紹介を順次説明をしていきます～

水人子（ミジンコ）



区役所近く警察学校前のいたち川の景観（昔と今）

上は洪水対策を目的にした初期の頃の河川事業、下は樹木、土石など利用して自然の流れを取り入れたその後の事業。